

卷第一第二段

江戸時代(十八世紀)

降り積みし高嶺のみ雪解けにけり清滝川の水の白波

〔新古今和歌集〕 卷第一 春歌上 二七七番

とめ来かし梅さかりなるわが宿をうときも人は折にこそよれ

〔新古今和歌集〕 卷第一 春歌上 五一七番

雲に迷ふ花の下にて眺むれば朧に月は見ゆるなりけり

〔山家集〕 ほか所収

聞かずともここをせにせん郭公山田の原の杉の群立ち

〔新古今和歌集〕 卷第三 夏歌 二二七番

ほととぎす深き峰より出でにけり外山の裾に声の落ち来る

〔新古今和歌集〕 卷第三 夏歌 二二八番

道のべに清水流るる柳陰しばしとてこそ立ちどまりつれ

〔新古今和歌集〕 卷第三 夏歌 二二六二番

あはれいかに草葉の露のこぼるらん秋風立ちぬ宮城野の原

〔新古今和歌集〕 卷第四 秋歌上 三〇〇番

小山田の庵近く鳴く鹿の音におどろかされておどろかすかな

〔新古今和歌集〕 卷第五 秋歌下 四四八番

秋篠や外山の里やしぐるらん生駒の嶽に雲のかかれる

〔新古今和歌集〕 卷第六 冬歌 五八五番

小倉山麓の里に木の葉散れば梢に晴るる月を見るかな

〔新古今和歌集〕 卷第六 冬歌 六〇三番

卷第二第二段



木の下に旅寝すれば吉野山  
花の衾を着する春風  
〔山家集〕所収

ながむとて花にもいたくなれぬれば  
散る別れこそ悲しかりけれ

〔新古今和歌集〕卷第二春歌下  
一二六番

吉野山やがて出でじと思ふ身を  
花散りなばと人や待つらん

〔新古今和歌集〕卷第十七雑歌中  
一六一九番



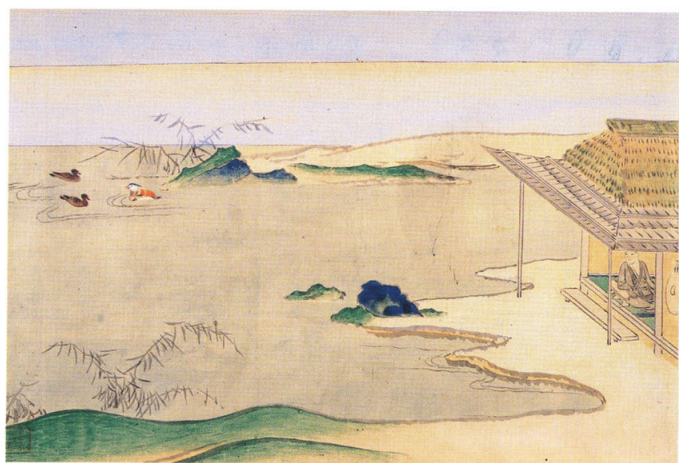
卷第二第三段



卷第二第八段

津の国の難波の春は夢なれや  
蘆の枯葉に風渡るなり

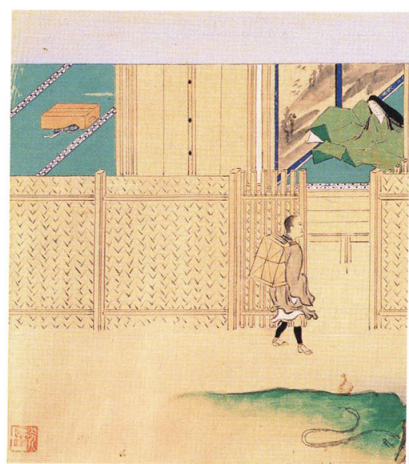
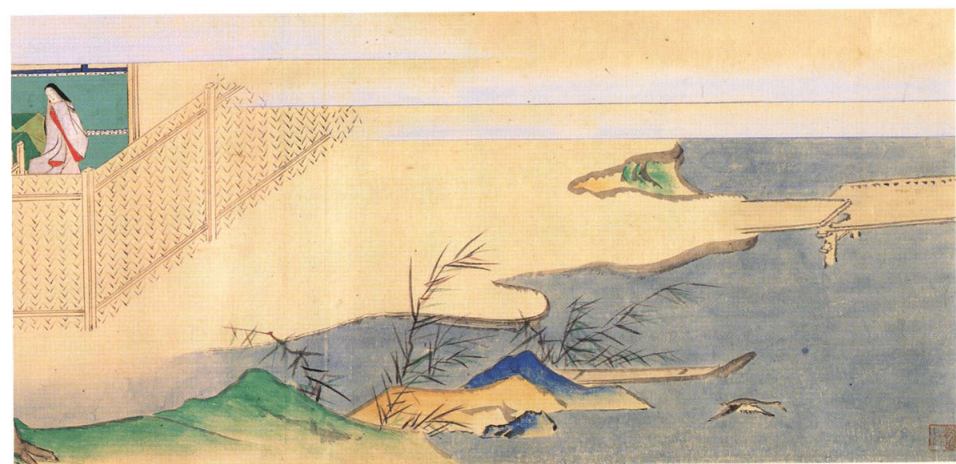
〔新古今和歌集〕卷第六冬歌  
六二五番



卷第二第五段

世の中をいとふまでこそ難からめ  
仮の宿をも惜しむ君かな

〔新古今和歌集〕卷第十歸旅歌  
九七八番



卷第二第九段

寂しさにたへたる人のまともあれな  
庵ならべん冬の山里

〔新古今和歌集〕卷第六冬歌  
六二七番



世の中を思へばなべて散る花のわが身をさてもいづちかもせん  
〔新古今和歌集〕卷第十六雑歌上 一四七二番

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

やまとうた―美のこころ

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 39

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十七年十月八日発行

© 2005, The Museum of the Imperial Collections